

# 琉球大学学術リポジトリ

## 東アジア漢字文化圏の中における琉球漢詩文の位置

メタデータ	言語: 出版者: 上里賢一 公開日: 2010-01-22 キーワード (Ja): 漢詩, 琉球漢詩, 東アジア, 比較文学, 中国文学, 安南(ベトナム), 琉球, 中国, 漢詩文 キーワード (En): Chinese Style Poetry, Ryukyuan Chinese Style Poetry, East Asia, Comparative literature, Chinese literature 作成者: 上里, 賢一, Uezato, Kenichi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/15027">http://hdl.handle.net/20.500.12000/15027</a>

平成十六・十七・十八年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）

東アジア漢字文化圏における  
琉球漢詩文の位置

（課題番号 一六五二〇二二四）

平成十九年三月

研究代表者 上 里 賢 一

琉球大学法文学部教授

# 目次

## 論文

琉球への漢籍の伝播と受容 上里賢 一……………一

琉球における儒学の受容 上里賢 一……………十一

## ハノイ、漢喃研究院蔵漢文資料紹介

奉使燕京総歌并日記……………二十五

## 中国各報章摘録

潘佩珠・定辰鐘賦他……………一〇五

## 琉球への漢籍の伝播と受容

上里 賢一

### はじめに

琉球への漢籍の伝播には、二つの経路がある。一つは、京都や薩摩などからの渡来僧によるもので、主に首里を中心にして寺院に伝えられた。もう一つは、明・清との直接交流を通して、進貢使節や官生・勤学などの留学生によって伝えられ、主に福建からの渡来人が居住していた久米村を中心にした系統である。この二つの系統は、それぞれ独自の特色を持ちながらも、相互に影響し合い融合して琉球の漢学の特徴を形作っていった。

本稿では、この二つの経路によって琉球に伝えられた漢籍と、それがどのような階層に受け入れられ、どのように利用されたかを概括し、琉球独自の漢籍の版刻（琉球版）はなされたのか、もし、琉球版が作られたとしたら、それはどのような動機によると考えられるか。そして、漢籍の伝来によって琉球の文化、なかならず教育や学問の状況は、どのような影響を受けたかということについて考察する。

漢籍の場合に限らず、琉球王国時代の研究全般について言えることだが、第一次資料が乏しいという状況がある。首里を中心にした寺院や首里王府所有の文献資料も、久米村の明倫堂や聖廟をはじめ個人所有の資料も、さまざまな要因で残っているものが少なく、そのため、冊封使の記録、家譜、『歴代法案』などの資料に記載されている断片的な記事と、真境名安興の『沖繩一千年史』をはじめとする研究書から、関係記事を寄せ集めて、再構築していくという方法を取らざるを得ない。

### 一 僧門の漢学

琉球への僧侶の渡来は、咸淳年間（一二六五～七四）の禅鑑（日本の僧侶か朝鮮の僧侶か不明）に始まる。彼は英祖王が創建した浦添の極楽寺の開基となった。それから百年後の一三六五年、頼重法印が波上山護国寺を開いている。さらに百年後芥隠（一四九五年没）が、一四九二年に創建された円覚寺の開山僧となっている。彼らは、仏典を中心とする書籍の伝来者であり、同時に漢籍の伝来者でもあった。十五世紀の尚泰久王（一四五四～六〇）の時代には、たくさんの寺院が創建され、巨大な鐘が铸造された。在位わずか六年の間に、二十三口の梵鐘が造られている。これらの寺院の鐘銘の大半は、僧侶の手によって書かれている。

「万国津梁の鐘」として知られる「首里城正殿の鐘」は、一四五八年に铸造されている。高さ一五四、五センチメートル、口径九四センチメートル、重さ六百キログラムもある。

大きさも特異だが、この鐘はそれに刻まれている銘文が、他の鐘とは違う独自の特徴を持つていることで広く知られている。普通、梵鐘は寺院にあるものだが、この鐘は首里城の正殿に掛着された。さまざまな特徴を備えた鐘であるが、ここでは、尚泰久時代に寺院で書かれた漢文の実態を示すものとして、その銘文の一部を示しておきたい。(注1)

琉球國者、南海勝地、而鍾三韓之秀、以大明爲輔車、以日域爲齒唇、在此二中間、湧出之蓬萊嶋也。以舟楫爲萬國之津梁、異產至寶、充滿十方刹、地靈人物、遠扇和夏之仁風(後略)

東アジアの海洋国家として、中継貿易で反映していた頃の琉球王国の誇りと自負を表したもので、格調高い文になっている。

これより七十六年後に渡来した冊封使陳侃は、王宮の近くにあつた天界寺や円覚寺を見物し、この「二寺の山門と殿宇は、広廠壯麗にして王宮に亞ぐ。正殿は五間、中に仏像一座を供え、左右は皆経数千巻を蔵す」(注2)と記録している。寺院に膨大な經典が收藏されていたことがわかる。

寺院を中心にした漢学の展開については、漢籍がどのように読まれたかを述べるところで再度とり上げることとする。

## 二 明・清からの直接伝播

琉球は一三七二年(洪武五)に、察度王が明の招諭に応じて使節を派遣してから明との正式な外交関係を構築し、以後一八七六年に日本明治政府によって進貢船派遣が差し止められるまでのおよそ五百年間、直接交流が継続された。

この間、中国からは二十三次の冊封使の派遣があり、琉球からは、進貢使、接貢使、謝恩使、護送使等の使節が派遣された。また、南京や北京の国子監に官生を、福州には勤学と呼ばれる留学生を派遣した。中国からの使節や、琉球からの使節や留学生らは、織物、糸、鉄器、陶磁器、薬材等の品物のほか、書籍も大量に持ち込んでいる。

勤学として福州で学んだ経験を持ち、進貢使節の一員となって数度の渡清の経験がある程順則(一六六三〜一七三四)は、とくに熱心に書籍の入手と出版に力を注いだ人物である。たとえば、一六八九年(康熙二八)接貢存留通事として二度目の渡清をしているが、九一年(康熙三〇)帰国の時、福建で二十五金を出して、『十七史』共計一五九二巻を購入し、久米村の孔子廟に献上している。一六九六年(康熙三五)の第三回目の渡清の時は、自身の作品集『雪堂燕遊草』と、福建の詩友陳文雄らの『雪堂贈言』を福州で版行している。また、一七〇六年(康熙四五)に第四回目の渡清、一七〇八年(康熙四七)の帰国に際しては、六〇金を出して『六論衍義』、『指南広義』、次男程搏萬の『焚餘稿』それぞれ一

部を版行し、版木は福州の柔遠駅（琉球館）に保存した。一七二二年（康熙六〇）の五回目の渡清の時は、やはり自費を投じて江南で『皇清詩選』（三十卷）数十部を購入して帰国し、王府の書院に一部、聖廟に一部、評定所に一部、残りは師友に贈ったという。（注3）一七二五年（雍正三）には、程順則の編纂で琉球最初の漢詩文集『中山詩文集』が福州で版行されているが、この版行に際しても費用の負担を含めて、程順則の力が大きく関わっていることは間違いない。彼は二十一歳の時に勤学となつて福州に留学した。この時彼は、以後終生の師となる陳元輔に師事した。また王登瀛、竺天植等をはじめ多くの人々と、福州の柔遠駅（琉球館）で交流している。（注4）

一七一八年（康熙五七）に明倫堂（学校）を建てて、国王に請い許される。これより以前にすでに孔子廟（一六七四年創建）があり、程順則には「廟学紀略」という聖廟を中心にした琉球の教育の沿革を記録した文章がある。「程氏家譜」によると、程順則は国王や王子、王孫と親しく、王宮に召されて四書、唐詩、春秋、貞觀政要等を講じている。

程順則のこの例からも分かるように、琉球の聖廟や明倫堂、王府の書院等には儒学を中心にした書籍が備えられていたことが伺える。また、役人の家には「四書」などの経書類の書籍があった。張學禮（一六六三年・康熙二年渡来冊封正使）は『中山紀略』の中で、「官宦の家は、俱に書室・客軒あり。庭に花・竹木、四時羅列す。架に列するものは四書・唐書・通鑑等の集なり。板翻高濶にして、傍に土言を譯す。本国の書亦廣し。ただ載する所は何典なるか、言う所は何事なるかを知らざるのみ」と言っている。（注5）

張學禮の『中山紀略』の記録からすると、彼が見た役人の家の書架に並んでいた四書・唐書・通鑑等の集は、日本版の漢籍であつた可能性が大きい。「板翻高濶にして、傍に土言を譯す」というのは、日本式の「送り仮名」や「返り点」のことを指しているからだ。琉球では、当時独自の出版はなかつたし、書籍は中国、日本、朝鮮等から輸入されていた。

### 三二 漢籍はどのように読まれたか

一五三四年（嘉靖十三）に渡来した冊封使陳侃は、『使琉球録』の中で「陪臣の子弟と凡民の俊秀なる者は、則ち中國の書を習讀せしめ、以て、他日、長史、通事の用に儲ふ。其餘は、但、倭僧に従ひて番字を書するを學ぶのみ」（注6）と記録している。これによると、中国の書（漢籍）は、役人の子と凡民の中の優秀な者が、将来の中国との交易に従事するために学ぶもので、その他は倭僧について番字（片仮名や平仮名）を学んだのである。早い時期から番字（片仮名や平仮名）が伝えられ、琉球国内に広がっていたことを示している。

漢籍の読み方も、日本から伝わった「訓読」と、中国の音読みでそのまま読む二つの方法が、久米村を含めて普及していた。久米村出身の政治家である蔡温（一六八二〜一七六一）は、その著作「獨物語」のなかで次のように述べている。（注7）

御当国は、題目和文相学諸用事相達候に付て永代和文の法式は相続可申候、漢文の儀は唐通融迄の用事にて前代より久米村へ其職業被仰付置候得共、久米村も平時の用事は和文相用得候に付て漢文調得勝手的人数甚少く罷居、尤上夫に漢文相調候方は、弥以出兼申候、然共平時進貢接貢杯の御状、例年の勤に候故、旧案見合作調可相済候得共、唐は大国にて其仕合次第、如何様成六ヶ敷儀敷致出来候半其時の表奏咨文少くとも其文句不宜儀有之候はゞ大粧成故障の儀に成立、万万後悔仕候共其詮無之積に候、右の計得を以平時久米村文学随分入精させ候儀専一に存候、表奏咨文さへ上夫に相調置候はゞ縦令渡唐役々の方於唐諸事相勤候内不宜儀仕出候共、其人迄の罪科に候、若表奏咨文の内不宜儀有之候はゞ国土の御難題に相係言語道断の仕合致出来候、此儀は能々入念不申は不罷成積に候（「獨物語」原文）

「琉球は和文をもつて諸用事を達するので、和文の法式は永代まで続くはずである。漢文は唐（清国）との通融のためということである。そのため前代から久米村にその職務をおおせ付けられているのに、久米村も日常の用務は和文を用いているので漢文を書くことの上手な者は少なくなり、満足に書ける者はいよいよ出ていないようである。それでも平時の進貢や接貢の時の文書は、例年の勤めの事だから、旧案を見て作って済ませることも出来ようが、唐（清国）は大国だから、どのような難しいことが出てくるか知れない。その時の表・奏・咨文が少なくともその文句が適当でないということがあると、大変な差し障りが出て来て、いくら後悔しても取り返しがきかない。そこで、このような時に備えて、日頃から久米村の文章を学ぶについては、十分精を入れておくことが大切だと思われる。表・奏・咨文さえうまく出来ておれば、たとえ、渡唐役人が彼の地での仕事中、宜しくないことがあつたとしても、それはその役人個人の問題として済ませることが出来ようが、表・奏・咨文の中に宜しくないところがあると、それは国の難題となる」（大意）

この文章は一七四九年（乾隆十四）に書かれたもので、陳侃の時代からは二百年程経過している。琉球において和文（日本文）と日本式の訓読が、この間に急速に進み、中国からの渡来人の居住地である久米村も、その勢いに呑み込まれていった様子が伺える。蔡温はその状態に危機感を抱いており、中国において如何なる緊急事態が起こっても、それに対応できるように、表文・奏文・咨文の作成能力を日頃から磨いておくようにすべきだということ、久米村の人士に喚起したのである。

一七六二年（乾隆二七）、土佐国（現高知県）大島に漂着した琉球船の乗り組み員潮平親雲上から得た情報を、土地の儒学者戸部良熙が記録した『大島筆記』にも、当時の琉球の教育の様子を伝える記事がある。

琉球の学校では、小学四書六経を教えている。近頃までは備旨という書を用いていたが、近年四書体註が渡り、これが集註の照考に簡明な宋疏じゃとて今はこれを用う。簡潔で全体見やすい本である。学校はあまり大きくはない。聖堂と並び立っている。学校の名は明倫堂という。王子以下誰でも就学する。学校でなくて、自宅で講ずる者もある。王子、按司、三司官など出講することもある。国王の侍講は別である。久米村の学官は本唐のとおり直読で教える。それを講官が国読へ通ずるようにも教える。点本は薩摩の僧文之の点を用う。傍から琉球朱子学かと問うたら、はなはだ怪しむ様子、そのわけは、本唐も琉球も、学業といえば小学四書集註章句、五経集伝よりほかなく、何学というような名目はないからである、と。(注8)

こ文章では、琉球の学校で使用している教科書のことや、教育の方法などが具体的に語られていて興味深い内容となっている。久米村の学問の内容に警鐘をならした蔡温と並べて検討すると、蔡温の嘆きを裏付ける内容となっていることがわかる。「久米村の学官は本唐のとおり直読で教える。それを講官が国読へ通ずるようにも教える。点本は薩摩の僧文之の点を用う」というところから明らかのように、久米村でも既に十八世紀半ばには、「本唐のとおり直読」すると同時に、これを「国読へ通ずるようにも教える」講官がおり、音・訓併用の読み方がなされていたのである。

さて、このように琉球で和文と日本式の漢文訓読がはやったのは、何故だろうか。最大の理由は、琉球語と日本語の言語構造がほとんど同じだということ。語彙に共通するものが多いということなど、漢語に比べると親しみやすいということがある。とくに泊如竹が来琉して、文之点が伝えられると、訓読は急速に広がり、久米村の教育にまで影響を与えるまでになった。

泊如竹は、一六三二年(崇禎五)に琉球に渡来し、尚豊王の国師となって朱子学を講義した。如竹は、室町時代の儒学僧桂庵禅師直系の学者僧である。桂庵禅師は、応仁元年に明国に渡り、禅の修行のかたわら朱子学を極め、『大学章句』を著し、日本における新註の嚆矢となった。臨済宗に属し、薩摩桂樹院の開山となった。その学統は桂庵から月渚、一翁、文之と継承され如竹に至っている。如竹が伝えた文之点は、言うまでもなくその師匠の南浦文之の考案した訓点のことである。(注9)

ところで、『大島筆記』が記録された二年後の一七六四年(乾隆二九)の序文をもつ潘相の『琉球入学見聞録』にも、当時北京の国子監に留学していた琉球人から、琉球の教育や文教の実態を聞いて記録された貴重な記録がある。まず、その「書籍」の項目の記録を見てみよう。

臣聞琉球文廟之兩廡、皆蓄經書。例取久米村子弟之秀者、十五歳爲秀才、十二歳爲若



秀才、於久米村大夫・通事中擇一人爲講解師、教於學。月吉、讀「聖諭衍義」。三・六・九日、紫金大夫詣講堂理中國往來貢典、察諸生勤惰。(中略)八歳入學者、於通事中擇一人爲訓詁師、教之天妃宮。首里設鄉塾三、亦久米人爲之師。外村人皆讀其國書(即法司教條)、學國字、以寺爲塾、以僧爲師。近日那覇等村亦多立家塾、讀經書、書多購於內地。但例不令攜「二十二史」等書、故史書略少。國王先後刊有「四書」・「五經」・「小學」・「近思錄集解便蒙詳說」・「古文眞寶」・「千家詩」・板藏王府、陳情即得。臣所見者有「四書」・「詩經」・「書經」・「近思錄」・「古文眞寶」白文、小註之旁、皆有鈎挑旁記、本係鐫刻、非讀時用筆添註如「諸錄」所云、亦未見日本諸僭號也。

(注10)

この記録をした潘相は、一七六〇年(乾隆二五)から六四年(乾隆二九)までの四年間、琉球官生の教習を勤めた人物である。この時の官生は梁允治、鄭孝徳、蔡世昌、金型の四人である。梁允治と金型は、入監して間もなく疫病のため死去している。潘相の琉球情報には、鄭孝徳、蔡世昌の口述と文献資料ということになる。

琉球の文廟の両廡には、経書が備えられていたこと。久米村の子弟は、十五歳で秀才、十二歳で若秀才となり、久米村の大夫・通事の中から一人を選んで講解師として教えていること。首里には塾が三つあって、久米村人が教師となっていること等は、漢学の教育に関係することを述べていると見てよからう。

その他では、寺院で僧侶を教師として国書(おそらく和文のこと)を学ぶ。最近那覇の家を塾にして学ぶことがある。経書を読むが、それは内地(中国)で購入したものである。

「二十二史」等の歴史関係の書は少ない。国王が「四書」、「五経」等を版刻し、版木は王府に保存しており、要求すれば手に入れることができる。臣(潘相)の見たこれらの書物には、白文の傍に小註がついており、鈎挑旁記(返り点や送りがな)がある。

この記録の前半は、当時の琉球における教育の実態を反映していると思われるが、後半部分は、琉球官生の苦心の口述をそのまま信じたために正鵠を欠くものとなっている。「国王が『四書』、『五経』等を板刻し、板木は王府に保存しており、要求すれば手に入れることができる」というが、これはすぐには信じられない。潘相が見たこれらの書物には、「白文の傍に小註がついており、鈎挑旁記(返り点や送りがな)がある」ことからすると、これらの書籍は、日本式の訓点が付いたもので、日本で版刻されたものである。久米村出身の鄭孝徳、蔡世昌が、これらの書物を携帯していたことは、日本式訓読の広がり浸透を示すものとして興味深い。

潘相は、琉球官生の持参した「四書」等の書籍に強い関心を寄せ、同時に琉球語の特徴や、琉球で漢籍を実際にはどの様な読み方をしているかについて、細かく記録している。例えば、「土音」の項目では、琉球語について次のように述べている。

或以二字爲一音、或以一字爲三音、或以三字爲一音、或以五・六字爲一音。如「春色」

二字、呼「春」爲「花魯」二音、則合書「ハロ」二字即爲「春」字、呼「色」爲「依魯」二音、則合書「イロ」二字即爲「色」字、是二字爲一音也。如村名「泊」與泊舟之「泊」並讀作「土馬伊」、則一字三音也。村名喜屋武、讀作「腔」字、則又三字一音也。

(注二)

琉球語のこのような特徴を述べた後で、続けて日本式の訓読の決まりについて細かく論述し、実際の読み方について、『大学章句』の冒頭部分を例にして、次のように説明する。

大學之道、在明明徳、在親民、在止於至善。

大學之道（大學、ダイアカ、之道、ノミツハ。總讀云：ダイアカノミツハ）、在明明徳（明徳、メトタ、明、アチラカニスルニ；在、アリ。總讀云：メトタアチラカニスルニアリ）、在親民（民、タミヲ、親、アラタニスルニ；在、アリ。總讀云：タミヲアラタニスルニアリ）、在止於至善（至善、シサンニ；止、トロマロニルニ；在、アリ。總讀云：シサンニトロマロニルニアリ）。

「大學」が「ダイアカ」（正しくはダイグアク）、「明徳」が「メトタ」（メトク）、「止」が「トロマロニルニ」（トロマロニ、またはトロマルニ）など、幾つか単純なミスはあるが、当時の琉球における漢文の読み方の実態を示すものと言つて良い。ここに紹介されている読み方は、明らかに日本式の訓読であり、潘相の言う「球人讀法」ではない。「旁附球字以便習」とか、「正文之傍、有球字講義」等と言うのも、漢文の傍に片仮名で付けられたもの（送りがな）を、留学生が琉球の文字と称し、潘相がそれをそのまま受け取つたために生じた誤解といふことができる。

留学生は何故、このようなごまかしをしたのだろうか。これには、幾つか同情すべき理由がある。最大の理由は、当時の琉球は一六〇九年以降、薩摩の支配下にあつたが、清国に対しては独立した国としての対応をしており、薩摩支配の実態を隠蔽する必要があつたこと。これとの関係で、將軍の即位や、結婚、死去などのおりには使節が派遣され、「江戸上り」が行われた。また、貿易も盛んに行われた。これらの機会を利用して、琉球は日本で流行している書籍を積極的に購入した。これも当然中国側には伏せられた。

ところで、琉球においては、この訓読の方法にも二つの方法があつたという。合音訓読（琉球語の発音による訓読）と、開音訓読（日本語の発音による訓読）である。比嘉春潮によれば、一八七九年（明治十二）の廢藩置県以前の琉球の学校における漢文は、首里・那覇・泊の村学校、平等学校、国学、久米村の明倫堂、宮古・八重山の南北学校ではすべて訓読で教えた。最初の『三字経』、『二十四孝』は合音訓読で、『小学』、『四書』、『五経』は開音訓読である。しかし、久米村だけは『小学』から『四書』、『五経』まですべて合音訓読で教えた、という。また、久米村の明倫堂、首里の国学、宮古・八重山の南北学校では、『二字話』、『三字話』などの「官話」が教えられた。将来和文を用いる職務につく大

和および国内向きの人は、最初は合音訓読、それから開音訓読を学び、唐向きの職務につくべき人々（久米村人と両先島の通事および官生志願の人々）は、ずっと合音訓読を学ぶ。比嘉春潮は、合音訓読と開音訓読の実例を『論語』によって次のように紹介している。

有朋自遠方來不亦樂乎（学而第一）

トウムアリ、エンポーユイチタル、マタタヌシカラズヤ。（合音訓読）

トモアリ、エンポーヨリキタル、マタタノシカラズヤ。（開音訓読）（注12）

#### 四 琉球板について

琉球に限らず、近代以前の書籍の出版は読者層の需要だけでは成り立たない。読者の要求に応えるための諸々の条件が必要である。たとえば、紙、版木、彫り師、印刷、製本、販売等である。公的機関が営利を度外視して、施策的、文化的理由から書籍を作ることがあっても、これらの条件を完全に無視することはできない。

琉球の場合は、独自の出版を持続的に運営していく上で、幾つかの困難がある。一つは土地が狭く人口が少ないこと。当然、書籍の需要階層である知識階級の層も薄い。隣の国や地域と離れており、広がりに限られる。紙や版木を調達し、技術者を育てて出版事業を興すには、市場規模が小さいこと等である。幸い中国、朝鮮、日本など進んだ地域から、安価で良いものが入手できる。琉球板の書籍が少ないのは、おそらくこのような理由からだろう。

琉球人の著作は、福州や薩摩・京都などで出版されている。版木を持ち帰って、那覇で刷った例はあるが、これは例外的なものである。（注13）それでも、いくら琉球で造られた書籍はあったようである。

琉球板についての記録は、一九一五年（大正四）と一六年（大正五）に沖縄を訪れ、沖縄県立図書館等で史料調査に当たった武藤長平（鹿児島県の第七高等学校教授）から始まる。彼の「琉球訪書志」には、琉球板として次ぎのような書籍が上げられている。（注14）

◎中山詩文集 元禄十一年（一六九八）

◎御教条 享保十七年（一七三二）

◎千字文 天保九年（一八三八）

◎太上感應篇大意 安政五年（一八五八）

◎童子摺談 弘化元年（一八四四）

◎小学監本 嘉永二年（一八四九）（3）

◎漏刻楼集 万延元年（一八六〇）

◎四書集註 嘉永二年（一八五〇）

◎四書俚諺鈔

同上

- ◎琉球詩録 明治六年（一八七三）
- ◎琉球詩課 同上
- ◎竹蔭詩稿 未詳
- ◎三字経 未詳
- ◎三字経 未詳

\*（ ）は筆者

武藤は、この時の調査で縄県立図書館の他、「伊是名朝睦、仲里朝茂の好意で尚家の『御蔵本目録』も閲覧の栄を得、尚ほ其一部分と琉球板四書の板木をも一覽した」という。しかし、琉球板の書籍そのものは、見る機会が無かったようだ。「琉球板の『四書集註』及び『四書俚諺鈔』の板木が尚侯爵邸にあり、『童子摭談』の板本が浦添家にあるに關はらず、其等の書籍が一向琉球に残って居ないのは遺憾に思ふ、予は『論語集註』一部を伊是名朝睦氏より拝受した、『童子摭談』は東風平東助君の舊藏本を圖書館でみただけで他では寓目しなかつた」と、述懐しているからである。

この記録から、一九〇〇年代の初頭までは、琉球の旧家に漢籍の板木が残されていたこと。武藤が尚侯爵家の家扶伊是名朝睦氏から琉球板『論語集註』をもらったこと等の重要な情報を得ることができる。

しかし、武藤があげた琉球板のリストの中には、厳密な意味から言う琉球板には含まれないものが混ざっている。書誌学的な意味で言う琉球板とは、富島壯英氏の言う「琉球で版木を彫って印刷・発行された木版本」（注15）ということになるが、例えば、『中山詩文集』は福建で彫られて印刷・発行されたもので、厳密な意味では福建刊本とすべきものである。また、武藤があげた元禄十一年（一六九八）発行の中山詩文集は、『中山詩文集』の中心をなす編纂者程順則自身の著作『雪堂燕遊草』と『雪堂贈言』が、福建で発行された年であり、これらの作品を含む『中山詩文集』の発行は、一七二五年（雍正三）である。『琉球詩録』と『琉球詩課』もやはり中国刊本である。

富島氏は、武藤の琉球板について検討して、『御教条』、『童子摭談』、『太上感応篇大意』の三点についてだけ琉球版本と認め、その他は排除している。これが、妥当な見解であろう。富島氏は、武藤があげなかつた『聖諭広訓大意』（一九世紀中期、草書体）と『六諭衍義大意』（幕末から明治初年、仲本朝睦刊、豊川正英編著、仲本朝重書、楷書・草書併記）の二つを琉球版本として先の三点に加えている。

それでも、琉球版本はかなり少ないことがわかる。琉球人の著作は、程順則『中山詩文集』、『指南廣義』、東国興等『琉球詩課』、林世功・林世忠『琉球詩課』、同『琉球詩録』、蔡大鼎『閩山遊草』、『北燕遊草』等は福建で版刻され、東国興等『東遊草』、楊文鳳『四知堂詩稿』等は江戸や大阪で彫られて出版された。

注1 鐘銘の全体と鐘の特徴、この鐘が鑄造された尚泰久王の時代的特徴については、小島

- 瓊禮・金城美智子『南海梵鐘の世紀 首里城正殿の鐘と墨絵「光と影の世界」』沖繩総合図書発行 一九九一年が詳しい。
- 2 陳侃『使琉球録』(『那霸市史 冊封使録関係家譜(読み下し編) 資料編第一卷三』昭和五十二年発行 八頁。なお、原文は次の通り「(八月中秋節)、(中略) 二寺山門、殿宇広殿壯麗、亞於王宮。正殿五間、中供佛像一座、左右皆藏經数千卷」(同書(原文篇) 六頁)。
- 3 「程氏家譜」(『那霸市史 家譜資料二(久米村系) 資料編第一卷六 昭和五十五年発行参照)。
- 4 同前注
- 5 「官宦之家、俱有書室・客軒。庭花・竹木、四時羅列。架列「四書」・「唐書」・「通鑑」等集。板翻高濶、傍譯土言。本国之書亦廣、但載不知所載何典、所言何事耳」張學禮「中山紀略」(臺灣文献叢刊第二九二種 清代琉球紀錄集輯(第一冊) 臺灣銀行經濟研究室編印 民国六十年 十一頁)。
- 6 陳侃『前掲書』十五頁。『那霸市史 冊封使録関係家譜(読み下し編) 資料編第一卷三』昭和五十二年発行 なお、原文は次の通り「陪臣子弟與凡民俊秀者、則令習讀中國書、以儲他日長史・通事之用。其餘但史從倭僧學番字而已」(同書(原文篇) 二十頁)。
- 7 崎浜秀明『蔡温全集』本邦書籍 昭和五九年発行 八三頁。
- 8 戸部良熙『大島筆記』
- 9 家坂洋子『薩摩蔭絵巻 儒者泊如竹の生涯』八重岳書房発行 昭和五七年参照。
- 10 潘相『琉球入学見聞録』(臺灣文献叢刊第二九九種 清代琉球紀錄集輯 臺灣銀行經濟研究室編印 民国六十年 七十七〜七十八頁)。
- 11 同前注 七十六頁。
- 12 『比嘉春潮全集』第三卷 文化・民族篇 沖繩タイムス社 一九七一年発行 五三二〜五四五頁。
- 13 琉球救国運動の課程で、日本と清国の交渉に抗議して北京で自死した林世功の三十三回の時、新垣家で保存していた『琉球詩録』の版木を使って刷り、会葬者に配ったことが、当時の新聞記事に見える。拙論「林世功三十三回をめぐる詩文」参照。
- 14 武藤長平『西南文運史論』復刻判 同朋社 一九七八年発行 一八五〜二〇三頁。
- 15 富島壯英「近世琉球の出版文化——琉球版本を中心に——」(『琉球の歴史と文化——山本弘文先生還暦記念論集』 本邦書籍発行 一九八五年。栄野川 敦・高津 孝「琉球板『論語集註』について」『汲古』第三十号 汲古書院 平成八年・

「東亞漢語漢文的翻譯・傳播與激撞 十七世紀至二十世紀」學術検討会 報告

(二〇〇六年十二月 台湾中央研究院 中国文哲研究所)

# 琉球における儒学の受容

上里賢一

## 一 琉球への儒学の伝来

儒学は、近代以前の日本はもちろん、東アジアの思想的バックボーンとして、強大な支配力をもった思想体系であった。中国で生まれたこの思想は、朝鮮、日本、安南などの東アジア諸国に伝えられ、それぞれの国の政治権力と結び付いて、国家の支配イデオロギータとなった。五倫、五常は、教育理念を支える徳目の中心に位置づけられて、人々の生活を律する道徳観念となり、社会のすみずみまで深く浸透していった。

琉球も、朝鮮や日本からかなり遅れたとはいえ、国家としてのまとまりを獲得して、王国の形が整ってくるのと歩調を合わせるかのように、中国文化圏（儒教文化圏）の仲間に入っていくことになる。

琉球への儒学の伝来には、二つの経路がある。日本の僧侶（京都五山系）や薩摩の儒者たちによって伝えられた経路と、冊封使やその従客、官生や勤学などの留学生による中国からの直接ルートである。

一二六五年（英祖六年・咸淳二）、禅鑑という僧が渡来、浦添に極楽寺を創建。琉球に仏教を伝える。一三六五年（察度十六年・洪武至正二五）頼重法印が来琉して、波上山護国寺を開く。一四〇〇年代の中葉尚泰久王の時代（一四五四〜一四六〇）になると、寺院が相継いで建立され、大きな鐘が鑄造されるようになる。その鐘の銘文の撰者は、ほとんどが僧侶である\*。

十三世紀から十七世紀にかけての日本僧の琉球への渡来は、たんに仏教の伝来と布教という意味においてばかりでなく、琉球における漢字文化の伝来と展開を見ていく上においても重要なできごとであった。何故なら、これらの僧侶は日本の室町時代の五山文学を支えた階層であり、仏典に通じていたことはもちろん、儒教をふくむ中国の学問にも造詣が深かったからである。寺院を中心とする僧侶による漢字文化の伝来が、そのまま儒教の伝来にはならないが、中国文化との出会いという意味では、文化史的に見て大きな出来事であることに違いない\*。

一六〇九年（尚寧王二一・萬曆三七）の薩摩軍による琉球侵攻の前後に、日本僧袋中が渡来（一六〇三年）し、間もなくして薩摩の儒者である泊如竹が来琉して文之点を伝える（一六三二年頃）等、琉球の儒教史上に大きなできごとが起こっている。泊如竹は、日本の江戸時代に『四書新註』に訓読を施して、日本における朱子学の新局面を開いた南浦文

\* 小島瓊禮・金城美智子著『首里城正殿の鐘と墨絵「光と影の世界」』資料編 沖縄総合図書（一九九一年）一〇六〜一〇九ページ 参照。

\* 村井章介著『東アジア往還——漢詩と外交——』朝日新聞社（一九九五年）一八二〜二二三ページ 参照。

之の弟子である。文之は、薩摩の朱子学を藩学にまで広げた桂菴禪師の学統を受け継いだ儒学者である。泊如竹の渡来によって薩南学派の訓読が伝えられたことは、琉球における漢学の普及に大きく寄与した。

泊如竹の琉球への渡来と、その琉球における事跡については、井上哲次郎『日本朱子学派之哲学』、鹿兒島市編『薩藩の文化』等にその伝記がある。ここでは、西村時彦『日本宋学史』によって、その一端を示すことにする。

歳六十三の寛永九年（或云十年）海に浮かんで琉球に遊べり、是より先琉球の圓覺寺には文之の友なる天叟禪翁あり、二州の門下にして文之の同學なる景叔春蘆二僧も亦先師の典籍を携へて跡を此に寄せしこと、南浦の文に見えたれば、桂菴学派は夙に琉球に入りし者の如し、然ればにや如竹は国王の師事する所と為りて、其の世子に侍讀せり、琉球に流寓せし明人梁澤民甚だ如竹を敬し、其の居に名けて顧天菴と曰へりとぞ、此より琉球人は人倫を知り禮義を辨ぜしが、後世に至りても文之點に非ざれば讀まず、琉球の江戸に至る毎に、文之點四書を購ひ歸れりとぞ、是れ如竹教化の致す所なるべし。<sup>53</sup>

この文章には、重要な情報が多い。如竹が琉球に來た時の年令（六十三、または六十四歳）。彼より先に友人の天叟という僧侶が円覺寺に入っていたこと。桂菴学派につながる同学の景叔・春蘆二僧も既に琉球に來ていたこと。明人の梁澤民と親しくなったこと。如竹が文之点を伝えてから、琉球では文之点四書を江戸（東京）で購入してきて、使用していたこと等である。

さて、もう一方の中国との直接の交流による中国文化の伝来は、どのようにして始まったのだろうか。頼重法印來琉の七年後一三七二年（察度二三・洪武五年）に明の太祖の招撫使楊載が渡來し、これに応えて中山王察度が弟泰期を派遣して明国との正式な外交関係が始まり、一八七九年（明治十二年・光緒五年）に琉球が沖繩県となるまでの約五百年間続いた。

この間、二十四回の冊封使の渡來があり<sup>54</sup>、南京・北京の国子監に送られた留学生（官生）は百名を越え<sup>55</sup>、福州で学ぶ勤学と呼ばれる留学生はその数倍にも達した。また、明代の初期には不定期に（ほぼ毎年）、清代は二年に一回の進貢船の派遣があり、進貢の翌年には接貢船が送られた。また、漂流者の護送、謝恩使や進香使の派遣等の名目で臨時の使節が送られた。

冊封使は、科挙の試験に合格した優秀な人物が選ばれており、儒学に通暁していることはもちろん、詩文の作成や書法も一流の学者が任ぜられていた。また、その従客として渡

<sup>53</sup> 西村時彦（天四）著『日本宋学史』 梁江堂書店（明治四二年）二六七ページ。鹿兒島市著『薩藩の文化』（昭和五〇年）総論 第一宋学の部参照。家坂洋子著『薩摩薩繪卷 儒者泊如竹の生涯』八重岳書房（昭和五七年）参照。

<sup>54</sup> 一四〇四年（武寧九・永樂二）に陳時中が渡來し、中山王武寧と山南王汪応祖を冊封している。これを分けて数えると二五回となる。ここでは、これを一回の渡來と見て二四回とした。その場合、一三七二年（察度二三・洪武五）の楊載は、招撫使であるから、冊封使としては扱わない。

<sup>55</sup> 仲原善忠著「官生小史」 『全集』第一卷 沖繩タイムス社（一九七七年）。

来した人物にも、詩文や書法に優れた人物が入っており、琉球の文化に絶大な刺激を及ぼしたことは、言うまでもない。

また、官生や勤学として中国に渡った留学生たちは、儒学を中心とする中国の学術文化に直接触れると同時に、さまざまな階層の人々との交流を通して、大国の先進文化や技術等の習得に励んだ。

## 二 僧門における漢学

琉球の儒学は、日本經由と中国からの直接の伝来という二つの経路が、当初はそれぞれの特色をもって発展し、後には融合しあってそれぞれの展開を見せる。

まず、日本から渡来した僧侶らの漢文の知識のレベルを示すものとして、彼らが主な担い手として作られた十五世紀中葉の碑文や鐘銘の中から一つだけ例をあげる。

琉球國者南海勝地而鍾三韓之秀以大明爲輔車以日域爲唇齒在此二中間湧出之蓬萊嶋也以舟楫爲萬國之津梁異産至宝充滿十方利地靈人物遠扇和夏之仁風故吾王大世主（庚寅）慶生（尚泰久）茲承宝位於高天育蒼生於厚地爲興隆三宝報酬四恩新鑄巨鐘以就本州中山國王殿前掛着之定憲章于三代之後 文武于百王之前下濟三界群生上祝萬歲宝位辱命相國住持溪隱安潛叟求銘々曰

須弥南畔 世界洪宏

吾王出現 濟苦衆生

截流玉象 吼月華鯨

泛溢四海 震梵音聲

覺長夜夢 輸感天誠

堯風永扇 舜日益明

（戊寅）六月十九日（辛亥）

大工藤原國善

住相國溪隱叟誌之\*

十五世紀中葉から後期にかけて、琉球では三十口かい梵鐘が鑄造されている。この鐘銘は、一四五八年（尚泰久五・天順二）に作られ、首里城正殿に掛けられたもので、琉球では「萬國津梁の鐘」として親しまれているものである。溪隱安潛は、相国寺の住職であった。京都の五山に同名の寺があり、何らかの関係があったものと思われる。この時期に溪隱安潛は、ほとんどの鐘の銘を手がけており、国王尚泰久との関係の深さを知ることができる。

その後、一四九二年（尚真十六年）に首里城の近くに円覚寺が創建され、琉球における臨済宗の総本山となるが、一四九四年の落成とともにその開基僧になった芥隱は、京都南禅寺の僧とつたえられており、琉球と京都五山とのつながりが密接だったことを示してい

\* 同注一、小島・金城『前掲書』参照。



## 二一 久米三十六姓と明倫堂

日本渡来の僧侶の漢学が、主に首里を中心にして展開されている頃、一方では、中国福建省から渡ってきて那覇の一角に居住していた「閩人三十六姓」と呼ばれる集団による中国文化の拠点があった。

『大明会典』の記録では、その最初の派遣は一三九二年（察度四三・洪武二五年）である<sup>※</sup>。琉球と明国との交易の利便を図るため、航海に巧みな福建沿海の技術者を賜ったという。彼らが琉球に入ってきた当初は、その居住地を「唐営」といつていたが、後に「唐榮」と改め、ついで「久米村」<sup>※</sup>と呼ぶようになる。

「久米三十六姓」は、明・清代の中国及び東アジアの国際情勢の変動と、琉球の東南アジア貿易の変転にゆられて盛衰を繰り返しながら、一三九二年（洪武二五）から、一八七九年（明治十二）に冊封、進貢、慶賀の各使節の派遣が禁止され、琉球が沖縄県となるまでの約五百年間、琉球と中国をはじめとする東アジア各国との対外交渉を支える実務・技能集団として活躍した。

「閩人三十六姓」の渡来と共に、同時に琉球からは、中山と南山から三人ずつの留学生（官生）の派遣が始まっている<sup>※</sup>。明代の官生については、嘉靖年間に派遣された鄭廻と萬曆年間の鄭週兄弟の他には見るべき成果は少ない。しかし、清代に入ると、帰国後通事や教育者として活躍する人物が輩出しており、琉球の進貢使節の通訳や文書の作成、航海の指揮や船の修理など、琉球と清国との交易の実務を支える重要な役割を担って活躍した。

留学生は、当初王の一族やその周辺の権力者の子弟が送られたが、その後清代の末期に改定されるまで、ほぼ久米村の子弟が派遣されている。しかし、清代の留学生（官生）の派遣は、琉球で新しい国王が即位し、これを冊封に来る使者にお願いして皇帝の許可をもらう、という手続きを踏むようになったため、一王代に一回の派遣ということになった。これは、何時あるとも決めがたい、極めて不安定な制度である。

中国との朝貢関係の継続は、琉球の重要な国家事業であり、この事業を担う人材の養成は、国家の人材育成の眼目である。久米村は、琉球の中国や東アジア貿易を実質的に担う技能集団であり、琉球と中国との朝貢体制が維持される限り、その役割の重要性は薄れることはない。

そのため、王府は久米村の子弟を中心にして、進貢船や接貢船が派遣されるたびに、語学の学習を中心にして、さまざまな目的を定めて、留学生を派遣した。この留学生は、「官生」と区別して「勤学」と呼ばれ、もっぱら福州の柔遠駅（琉球館）に滞在して、福州の師匠について学習した。

\* 小島瓊禮「芥隠承統伝」『球陽論叢』ひるぎ社（一九八六年）五七五～五六九。

※ 閩人三十六姓の下賜については、『太祖実録』には記載が見えない。洪武二五年説は琉球側の『中山世鑑』、『中山世譜』に記録がある。中国側の記録としては、『大明会典』巻一〇五 朝貢一 琉球国の項、『明書』巻一六五 四国伝一 琉球の項などがある。

※ 池宮正治・小渡清考・田名真之編『久米村―歴史と人物』ひるぎ社（一九九三年）

\*10 同注5。

官生と比較した時、この勤学は数も多いし、滞在年も官生が三年程度なのに対して五年から七年くらいの長期留学が多い。また、学習内容も「読書習礼」、「暦法」、「科律」、「漢方」、「風水」等広い分野にまたがっている。同一人物が二回以上、勤学の身分で渡清している例もあり、比較的自由であった。帰国後の留學生の活動内容を見ても、勤学出身者の活躍が目立つのは、その数の多いこと、学習目的が明確だったことなど、比較的自由な制度として運用されたことと、関係があると思われるであろう。

久米村では、一六七四年（尚貞六・康熙十三）に孔子廟が創建されている。これより九年後の一六八三年（尚貞十五・康熙二二）に来島した冊封正副使汪楫・林麟焯は、「琉球國新建至聖廟記」を書いていいる。琉球國は、海を隔てた遠方にあるのに、このたび聖廟を久米村に建てた、これにより琉球の文教は発展していくに違いないとのべている<sup>\*二</sup>。

一七一八年（康熙五七・尚敬六）久米村に明倫堂が創建された。程順則の建議によるもので、琉球最初の教育機関の誕生となった。程順則は、琉球における儒学の普及と教育に大きな貢献をした人物である。彼の教育にかける熱情は、明倫堂の創建より十二年も前に「廟学紀略」<sup>\*三</sup>を書いていいることでも明らかである。これは、琉球における儒学の歴史について、久米村を中心にして記録したものである。したがって、先に述べた僧門の学問やこれを継承する薩摩の朱子学の伝来と広がりについては、全く触れていない。

程順則によれば、久米村の儒学は、明初の三十六姓の渡来と官生の派遣に始まる。紫金大夫蔡堅が、萬曆年間に、聖像を絵にして家に祀り、これを拝していた。紫金大夫の金正春らが、康熙十一年に聖廟の建設を請願し、康熙十三年竣工した。明倫堂の創設の四十年以上前のことである。

明代初期、三十六姓が渡来して間もない頃であろう、久米村の子弟の教育のために明国から毛掣台、曾得魯、張五官、楊明州の四先生が来ている。恐らく彼らは、先に派遣されている閩人三十六姓を、琉球と中国の交易を支える人材として育てるための、教育を担当する教授団だったのではないか。航海術や船の修理等のことは、もともと福建省沿海出身の三十六姓が得意とする分野だから、毛掣台らの任務は、彼らに航海往復文書の作成やその管理等の基本を教授することにあつたと言えよう。『歴代宝案』等に残っている表文や咨文を見ていいると、その文章には、儒教の教典（経書）を典拠としたものが多く、航海往復文書の作成には、経書をはじめとする中国の学術に対する深い理解が求められた。後になると、国子監に留学した官生が帰国して、経学の解説をする講師になったり、またその読みに精通していいる者が訓誥師になったりして、久米村の中から学術的な指導者が育つていいる。

久米村の明倫堂における教育は、琉球の対外交渉を支える人材の養成に際するといいう目的に沿って進められたことは、言うまでもない。そのため、通訳や文書の作成など実地で役立つ事が、優先されることになる。久米村の子弟は、その要請に応えるべく、早くから教育された。成長すると勤学となって福州に留学し、帰国すると琉球の進貢船や接貢船の通事や正議大夫などとなって活躍した。このように久米の明倫堂は、専ら久米村の子弟の

<sup>\*二</sup> 汪楫『使琉球雜錄』卷十五 芸文 参照。

<sup>\*三</sup> 拙編『校訂本中山詩文集』九州大学出版会（一九九八年）二六七～二七五ページ。

ための教育機関として機能し、首里や那覇などの琉球士族の子弟には開放されていなかった。

#### 四 程順則と蔡温の儒学

ここで久米村の儒学の発展に大きな貢献をした程順則（一六六三〜一七三四・康熙二〇〜雍正十二）と蔡温（一六八二〜一七六一・康熙二一〜乾隆二六）について、簡単に見ておこう。この二人の事跡を概観すれば、久米村の知識人のたどる人生の道程を描くことができる。

##### ●程順則について<sup>\*13</sup>

程順則は、父泰祚（一六三四〜一六七五）と母眞饒古樽の長男である。父泰祚は、一六七二年（康熙十一）進貢都通事となって渡清し、北京へ上つての帰途、蘇州に来たところで、福州における耿精忠の反乱のため足止めとなり、一六七五年（康熙十四）に病を得て死去した。程順則の数え十三歳の時である。十四歳で元服して秀才となり、年俸一石五斗を給せられた。この頃から、久米村の天妃宮にあった学習所で、当時の久米村の最高の学者鄭弘良に就いて儒学の学習を始めた。

一六八三年（尚貞十五・康熙二二）、二十一歳で通事となり同年勤学となって福州へ渡る。翌年春北京へ上る使者と共に北京へ赴き、その帰途蘇州の父親の墓前に詣でて霊を祀る。その年の冬福州に戻り、陳元輔について四年間学び、一六八七年（康熙二六）五月に帰国する。そして、二年後一六八九年（康熙二八）接貢存留通事となって再び渡清。一六九一年（康熙三〇）六月帰国。二度目の渡清の時も、福州で陳元輔の教えを乞いながら、精力的な活動を展開している。たとえば、かれはこの時福州柔遠駅に土地祠と崇報祠を建て、自らその文を書いた。また、帰国に臨んでは、自費二十五金を出して、『十七史』（全一五九二卷）を購入し、孔子廟に献上した。

一六九六年（尚貞二八・康熙三五）、三四歳の時進貢北京大通事となり、十一月渡清。一六九八年（康熙三七）帰国。この時は、自らの詩集『雪堂燕遊草』を福建で板行して持ち帰る。一七〇三年（尚貞三五・康熙四二）王世子尚純、王世孫尚益に召されて、毎朝四書、毎夕唐詩を講ずる。この年、中議大夫に上る（年俸五石）。

一七〇六年（尚貞三八・康熙四五）進貢正義大夫となり（年俸六石）、十一月二三日那覇を出港。この時四回目の渡清であるが、彼は出発の五日前（十一月十八日）に、先にあげた「廟学紀略」を書き上げている。四回目の渡清で慣れていたとは言え、旅の支度のあわただしい中での執筆であった。これには、琉球儒学の振興のために、自らが引受なければならぬ責任の自覚があった。自ら負った責任を果たす決意を込めて書いた文章が、この文章であった。彼が密かに秘めていた決意は、今度の進貢の機会に、曲阜にある孔子廟に拝謁することである。その時、琉球における儒教の沿革について、孔子の霊前に報告すること、これによって、儒教の恩沢が遠く琉球に及んでいることを示し、琉球が中国と文化

<sup>\*13</sup> 程順則の伝記については、「程氏家譜」「那覇市史」資料篇第一巻の「家譜資料一（昭和五〇年）所収参照。

を共有する位置にあることを示したかったのである。

程順則一行は、一七〇七年七月福州を出発して北京に向かい、九月二六日山東省に到着し、孔子廟や孔林に拝謁し、準備していた「廟学紀略」を献上する。十二月五日北京を離れ、翌年三月福州に帰る。五月に福建を出て六月那覇に到着するが、この時も、程順則は福建で六十金を出資して『六論衍義』一部、『指南広義』一部、「焚餘稿」(十四歳で夭折した次男搏萬の詩集)を板行している。

一七一三年(尚敬一・康熙五二)江戸慶賀の掌翰史となり、翌年薩摩を経由して江戸に上る。この時、『六論衍義』を薩摩の島津吉貴に献上する。江戸では、新井白石や荻生徂徠らと会見し、帰途、草津で摂政近衛家熙の京都鴨川にある別荘物外楼の詩文を作ること依頼される。一七一五年(尚敬三・康熙五四)、紫金大夫になり、総理唐采司(久米村総役)となる。この年程順則は、近衛家熙に康熙皇帝御製詩宸筆石摺一枚、詩韻釈要一部、孔林楷杯一を献上している。

一七一六年(尚敬四・康熙五五)、「琉球國創建閔帝廟記」、「琉球國新建至聖廟記」を草し、一七一八年(康熙五七)、明倫堂創建を願い出て許可される。一七二〇年(康熙五九・尚敬八)、冊封に対する謝恩使となり、冊封正使海宝・副使徐葆光に従って、五回目の渡清をする。程順則は、すでに五八歳の高齢になっているが、翌年無事に帰国する。帰国に際してやはり自費を投じて、『皇清詩選』数十部(各部三〇巻)を購入し、王府内の書院、評定所、聖廟にそれぞれ一部ずつ献上し、残りは師友に贈った。彼が帰国した一七二二年(康熙六〇)將軍吉宗は、室鳩巢に『六論衍義』の和解、荻生徂徠に訓点を命じており、十二月に荻生徂徠点本『官刻六論衍義』が出版され、翌年三月に鳩巢大意本『官刻六論衍義大意』が刊行されている。

一七二五年(尚敬十三・雍正三)、程順則編『中山詩文集』が刊行される。これは、琉球最初の漢詩文集であり、久米村漢学の一端と、琉球の詩人の詩文の力量を計る上で極めて重要な資料である。この詩文集には、程順則自身の作品を中心にして、久米村の先輩や同僚、福州における恩師の詩文などが収められている。

程順則の五回にわたる中国への旅と、帰国に際して自費を投じて、板刻したり購入した資料は膨大なものである。その板本は、一部は福建の柔遠駅に保存されたが、持ち帰ったものもある。彼が琉球に持ち帰ったこれらの資料の中には、後に日本で板行されて広く流布したものもある。『六論衍義』は、その代表的なものであり、江戸時代の各藩の寺子屋(学校)の教科書として使用され、江戸期の庶民教育に大きな影響を与えている。また、彼の福州の恩師陳元輔の『枕山楼課兒詩話』は、程順則の序文を付けて京都で出版され、これも、作詩の入門書として広く親しまれている。程順則の琉球を拠点にした中国・日本に及ぶ活動の姿は、久米村漢学の最高の到達点を示すものといえる。

● 蔡温について<sup>\*)</sup>

蔡温(一六八二〜一七六一・康熙二一〜乾隆二六)は、程順則よりも二十歳ほど若い。程順則の長男(搏九)の一つ年下である。程順則のあとを継いで琉球の政治的・文化的黄

<sup>\*)</sup> 蔡温の伝記については、「蔡氏家譜」『同前』所収参照。

金時代を築いた人物である。

家譜によると、一六九三年（康熙三二）、十二歳で若秀才、十五歳で元服し秀才となる（俵米一石）。この年までに、従弟と一緒に大学中庸の素読を終える。講談師匠について学習したが、ほとんど理解できなかった。一六九七年（康熙三六）、十六歳の八月十五日の観月の遊びの時、友人から学問の出来が悪いことで侮辱され、これから発奮して努力した。これが、人生の第一の転機となった。

一七〇八年（尚貞四〇・康熙四七）、二十七歳の時進貢存留役となり兼ねて地理を学習することを命じられる。福州の地理の師匠は長樂の劉霽という人物であった。この時銀三〇両で大羅鏡一面と秘伝の書を手に入れている。翌年夏、納涼のために錦鶏山にあった凌雲寺を訪ね、長老から湖広の人という隠士を紹介された。この隠士との出会いが、人生第二の転機となった。

この隠士は蔡温との対談で、その詩作、儒学の力を見たうえで、あなたは二十八歳まで学問をしたというが、詩文をどんなに作っても、書物をいかほど読んでも、それは細工人の業と同じで学問とは大いに違うものだ。四書六経等はすべて治国の大事を説いているのであり、これを忘れて文を作り、文字の末にこだわるのは文字の糟粕を嘗めたようなもので、その正味を知らないものだと言われた。

これによって、蔡温は自分の学問に対する姿勢を反省し、その年の暮れまで、この隠士から学問の真髓、政治の根本について教えを受けた。

一七一〇年（尚益一・康熙四九）、二十九歳の時帰国。北部への騎馬旅行をし、多くの漢詩を残した。一七二二年（康熙五一）三十一歳二月、法司座（三司官座敷）になり、七月国師となる。

一七一六年（尚敬四・康熙五五）三五歳、進貢兼請封のため正義大夫となって福州に向かうが、洋上で暴風にあつて久米島にもどされ、翌年久米島を出て福州に着く。二度目の福州である。

一七二八年（尚敬十六・雍正六）四十七歳、三司官（行政のトップ）となり、国師を兼ねる。先輩の程順則は、この年名護間切地頭となっている。

一七五二年（尚穆一・乾隆一七）七一歳で、辞するまで二十四年間三司官の職にあつた。国師の職は、七十六歳で老齢をもつて致仕するまで四十七年間の長期に及んだ。

彼は、治水土木工事を監督したり、農業や林業に関する著作を著す等多くの著作を残した。『澹園全集』（家言録、客問録、実学真秘、治家捷径、居家必覧、凶治要伝を収録）の他、『澹園詩文集』もあつた。「平時家内物語」、「御教条」、「叢翁片言」、「独物語」、「醒夢要論」、「俗習要論」、「自叙伝」、「家道訓」、「農務帳」、「山林真秘」、「林政諸規則」など多彩である。

儒学を修めながら、林政、農政、治水等の国を治める事業に貢献したことから、儒学者というよりも、もっと現実的な政治家だったのではないかとされている。一八〇〇年（嘉慶五）に尚温王の冊封副使として渡来した李鼎元が、「朱子を学んで純ならざる者」と評したのは<sup>5)</sup>、彼の実学的な側面を見ての評価だったのではないかと。

<sup>5)</sup> 李鼎元「使琉球記」嘉慶五年六月十七日の条に「大雨竟日、長史覺得法司蔡温・紫金大夫程

## 五 教育制度の改革と久米村の抵抗

国都首里に学校が創設されたのは、一七九八年（尚温四・嘉慶三）のことである。久米村の明倫堂より遅れること八十年ということになる。最初は公学校と呼んでおり、国学と呼ぶようになるのは、一八〇一（尚温七・嘉慶六）からである。

先に述べたように、首里においては早くから僧侶による漢学が起こっていた。これに続いて、日本の朱子学の泰斗桂菴禅師の後を次ぐ南浦文之の弟子泊如竹が、一六三二年に渡来して国王尚豊の侍読となり、薩南派の朱子学を伝えた。如竹は、文之点という訓読法を琉球に伝え、朱子学の普及に大きな功績をあげた。しかし、「この時代には首里には正規の学校がなかったため、学齋といふて名門大家の邸に師を聘し、五六人宛集り教を受けるのもあり或は家庭で父兄又は他の師について学習したものである」\*5。という状態であった。

そこで尚敬王代（一七一三〜一七五二）には、首里にも学校を設立しようと言う気運が起こってきた。しかし、当時の三司官で尚敬王の女婿でもある蔡温が、学校設立の時期尚早論を唱えたこともあって、実現には至らなかった。蔡温は、理想の政治が実行された後に、設立されるべきものとしていたようで、そのため、永い間国学や郷学校は設立されなかった。琉球における教育機関は、久米村に明倫堂というもっぱら久米村の子弟を対象とするものがあるだけという状態が長く続いた。

首里に学校を設立しようとする長年の懸案は、十二歳で即位した尚温王と、尚温三年（一七九七）その国師となって、政策決定及びその実行に実質的な力を発揮した蔡世昌の大胆な実行力によって、一気に実現へむかった。真境名安興は、この時代的背景について、蔡温が理想の政治の実行の後に、学校は設立されるべきであるとした政治はその目標が達成されて、文化の爛熟期に向かいつつあると、次のように述べている。

尚敬王時代に至って沖繩の政治は殆ど完全なる域に近きまで遭ぎつけることが出来たのである。そして次代の尚穆よりは寧ろ文化爛熟期の徴候をきざしたやうで所謂階級制度行き詰の悲運を醸成し、総てが峠を越して漸々下り坂になったのであるが、この間にあって積年の頹勢を挽回しようとして最後の光明を放ったのが尚温の治世でこのとき人材登用の新政が叫ばれ系統立った学校設立の理想が実現せられたのである。\*6

尚温王と蔡世昌のコンビで、琉球の制度改革が進められたが、最初に取り上げられのが人材養成制度としての教育制度の大改革の断行であった。その一つが首里に国学を作ろうというものであり、もう一つが留学生（官生）派遣制度の改革であった。これは、どちら

順則・蔡文傳三人集、詩皆有作者氣。順則別著「航海指南」、言渡海事甚悉。蔡温尤肆力於古文、有「蓑翁語錄」、「至言」等目、語根經籍、有道學氣、問出入二氏之學、蓋學朱子而未純者」とある。臺灣文獻叢刊第二九二冊『清代琉球紀錄集輯』（第二冊）所収。

\*5 真境名安興著『沖繩教育史要』沖繩書籍販売社（一九六五年）八一〜八二ページ。

\*6 同『前掲書』一一七〜一七二ページ。

も久米三十六姓と利害が対立するものであり、すぐに激しい反対の声があがった。国学の設立は、それまで教育機関と言えば久米村の明倫堂だけであり、いわば教育は久米村が独占的に保持してきた。官生派遣も、明代の後半からは殆ど久米村の子弟が派遣されてきた。いずれも久米村の既得権となっており、この権益を失うことは、琉球国内における久米村の地位の低下につながる恐れがあり、危機感を抱いた久米村の人々は、改革に反対して激しい抵抗運動を展開した。

とくに、この改革を進めるリーダーの蔡世昌とこれに同調した鄭孝徳がともに久米村出身者で、一七六〇年（乾隆二三）に同じ久米村の子弟である梁允治、金型といっしょに官生となって国子監に派遣された秀才だったことである。『琉球入学見聞録』の著者潘相の直接の指導を受けた弟子であった。梁允治と金型は国子監入学後、不幸にして病で死亡したが、蔡世昌と鄭孝徳は優れた成績をあげて帰国した。二人に対する久米村の人たちの期待は大きかったに違いない。しかし、久米村の将来を左右しかねない改革の中心人物となつたため、久米村の既得権益を破壊する裏切り行為だととして、二人の行動を責め、とくに高い地位にある蔡世昌に批判が集中した。

蔡世昌は国師に就いた翌年（一七九八）、官生制度に対する改革と学校開設を提言する。いずれも従来の制度を大きく変更する大改革であり、はじめから久米村の反発は予想されたものである。しかし、改革は断行された。

それまで四人の官生は久米村だけから出してきたが、以後その半数を首里人に充てるというものである。これに対して久米村が猛烈に反発し、蔡・鄭兩人を悪罵・誹謗し、両者の家に石を投げたり、門前に糞尿を撒き散らしたりと、乱暴狼藉の限りを尽くした。王府ではこの騒動の責任者を拘引し、投獄した。首謀者は流刑に処せられた。いわゆる「官生騒動」\*<sup>20</sup>と呼ばれる大事件である。

## 六 首里国学の創設

「官生騒動」の熱気がさめやらない一七九八年（尚温四・嘉慶三）、琉球の最高学府を指す公学校（後の国学）が開かれ、同時に平等学校も設立された。国学と言わず、公学校と呼んだのは、久米村の役人たちから、中国の国学会典によれば、聖廟の付設されていないものは、これを国学と呼ぶことが出来ないと指摘されていたことが、大きな理由であった。

公学校は、中城御殿（世子の屋敷）に仮説されていたが、二年後当蔵村の勘定座に移転し、一八〇一年（尚温七・嘉慶六）に龍潭池の側に新しい校舎を建て、はじめて国学と呼ぶようになった。国学の学師（校長）には、蔡世昌が予定されていたが、「官生騒動」をめぐる心労も重なってか国学の落成を前にして病に伏したため、林家槐がこれにかわって任命された。

国学の開学を迎えて、尚温王はみずから筆を執って「海邦養秀」の額を掲げ、「国学訓飭士子論」を發し、建学の経緯と教育目標を声明した。理想に燃えた青年国王の尚温は、こ

\*<sup>20</sup> 比嘉春潮「沖縄の歴史 官生騒動」『比嘉春潮全集』第一巻 沖縄タイムス社（一九七一年）二九二〜二九七ページ参照。

の翌年（一八〇二）十九歳の若さでなくなる。教育改革に当たった尚温と蔡世昌の二人とも自らが進めた改革の成果を見ることはなかったが、琉球の教育史上に輝く業績として後世の評価は高いものがある。『中山世譜』では「王寛仁大度、好學重禮、文風大興、社稷奠安」<sup>30</sup>と、尚温王の短い生涯を讃えている。

首里国学の設立の経緯と教育の内容は、久米村の明倫堂の場合と違って、その内容を伝える資料が残っている。首里国学について述べようとすると、「国学訓飭士子論」<sup>31</sup>はその最も大切な資料である。その全文は次のとおりである。

稽古之學校、天子曰辟雍。諸侯曰泮宮、皆所以興行教化、作育人材、典至渥也。今予國都、自古以来、未建泮宮、典尚闕如。應建國學、興教化、育人材、以臻美備。然現今國財未裕、不遂興建之志。故於舊官署、權爲國學、著派按司向國藩、紫巾官向元佐、充國學奉行。並令當座官、金世裕・麻克昌・偕爲中取役、督理學務。

既又簡派金大夫蔡世昌、以爲學師。公同議立學規、薰勸諸生、務期風教修明。賢才蔚起、庶幾域樸作人之意。今蔡世昌、不幸病。故乃命中議大夫林家槐、充補學師、特製訓言、警飭諸生。其各諦聽。

蓋古之學者、先立品行、次及諸藝。爾諸生、幼聞庭訓、長列鄉學、朝夕誦讀、寧無講究。必也躬修實踐、砥礪廉隅、敦孝順以事親、秉忠貞以立志。

窮經考業、勿雜荒誕之談、取友親師、務化僑盈之氣。常防蕩軼、毋事逸遊、苟行止有虧、雖讀書何益。

若夫宅心弗淑、行已多愆。或蜚語流言、或聽官長、或營私獻媚、出入權門、或依附勢豪、欺孤凌弱、或招呼朋類、樹黨爲援。又以當悲當恨之行、反爲得計、而不公不道之事、罔顧害人。

乃若此人、名教不容、鄉黨勿齒、縱倖脫褫朴濫窃章縫。返之於衷、寧無愧乎。種々弊端、深可痛恨、

故返復倦倦、特宣訓言、使爾等共體予心、恪遵明訓、一切痛加改省、爭自濯磨、勤學積行。逢時得志、不特爾身有榮、即爾祖先、亦增光寵矣。

若乃玩愒勿儆、暴棄自甘、則是爾等、冥頑無知、終不能率教也。既負栽培、復于咎戾、國法具在。予亦不能爲爾等寬矣。

自茲以往、無論名門與寒陋、如有積行動學、爲國宜猷者、則雖布衣子弟、我將舉而用之。如或敗檢蝮閑、不遵明訓者、則雖貴族子孫、我將退而去焉。

凡各學、奉行師長、並宜傳集諸生、多方薰勸、以副予懷。否則職業勿修、咎亦難追、勿謂予言之不預也。

爾多士、尚謹聽之哉。

嘉慶三年戊午穀旦訓飭子諭

<sup>30</sup> 「中山世譜」一九一ページ、波普猷・東恩納寛惇・横山重編『琉球資料叢書』第四卷 鳳文書院（昭和十五年初版、昭和六三年復刻）所収。

<sup>31</sup> 原文は、同「前掲書」一七九ページ、『沖繩県史』第十四卷資料編四「琉球藩雜記 五」（雜事 学校医院 寺社）（二）学校之規則の部参照。



この訓示は、若い国王の人材養成にかける理想を開示したものである。文章は、国学が必要とされる理由について、中国の例を引いて説くことから始まる。公学校の設立の時、学師となった蔡世昌が、病のために国学の責任者になれないことに触れているのは、国学創設のために苦勞を共にした功勞者に対する思いやりの表明である。「先立品行、次及諸藝」というのは、学ぶ者の心得えを解いたものである。何よりも品行が大切であると強調している。「苟行止有虧、雖讀書何益」も同様である。そして、もっとも注目されるのは「自茲以往、無論名門與寒陋、如有積行勤學、爲國宜猷者、則雖布衣子弟、我將擧而用之。如或敗檢蠅閑、不遵明訓者、則雖貴族子孫、我將退而去焉」という部分である。人材登用の基本理念と方針が述べられている。ここには、官吏を輩出する士族層や門閥の力を背景にして官吏となる階層に対する強い戒めがある。今後の人材登用は、実力主義だと宣言したわけである。「積行勤學」した者であれば、たとえ身分の低い階層の子弟であっても登用する。逆に怠けて、学習しないものは、貴族の子弟といえども登用しないと言う。甘えを許さず、厳しい修練を積むことを求めたのである。

## 七 国学の諸規則と教育内容

国学の教育方針を定めた学則は、朱子の白鹿洞書院の教条をそのまま採用している。それは、「五教之目」、「爲學之序」、「修身之要」、「處事之要」、「接物之要」からなっている。たとえば、「五教之目」は「父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信」となっている。いうまでもなく、儒教の基本的徳目である「五倫」である。この他、歩行、言語、衣冠、容貌、飲食などの心得えが述べられているが、ここでは省略する。

壁書といって学校内において守るべき規則がある。課程別の学生数と入学資格、年令についても決まりがある。学生の定員は厳密な決まりはなく、時によって増減があったものの、通常は講談課程は、学生数二百六十名、官話詩文課程は、四十名となっていた。いずれも平等学校の卒業者である事が入学資格となっている。入学年令は十七〜十八歳。在学年数は最長七〜八年。この他に聴講も許されていた。講談課程の学生は、将来行政官、外交官（中国への使者）、事務官、經學の師匠などになることを希望するものであり、教科書も四書五經、近思錄、史記などの歴史書、唐詩、呈文、咨文、録文、論説などが中心である。官話詩文課程の学生は、外交官（中国への使者）、文書の作成や翻訳、教員等の希望者であり、官話（漢語）、詩文、作文、作詩などが中心である。

試験は毎月一回行なわれるものと、期末（毎年二、五、八、十一月）に実施されるものの二種類がある。試験科目は、講談課程は、四書体註（およそ一枚半）、五經の中から詩經、書經、易經、礼記、春秋（それぞれ一枚半）、二十一史の中から訓点をさせるもの（一枚半）、呈文、咨文、録文、論文の中から師匠の選定によって文章起草する（三枚程度）。官話詩文課程は、官音（四声句読）、「尊駕」「百姓」及び「人中話」の中から、朗読（一枚）と、四書体註（一枚半）の訓点、そして、作詩となっている。

国学への入学者は、士族であるが、平等学校を修了していることが条件であった。士族の中でも身分の高い貴族や門閥の出身者は、強制的に入学させ、その他は希望に任せていた。しかし、「国学訓飭士子論」の中で、国王が宣言している通り、国学の修了者でなければ、王府の役人になることはできなかった。

国学には、事務の処理や学生の監督をする者と、専ら教育指導に当たる者とがいた。事務的な仕事に当たるものには、奉行、中取、筆者と呼ばれる者が当たり、教育指導には、師匠がいた。奉行のうち按司奉行が学長、親方奉行が副学長で、その下に中取二人、筆者二人、仮筆者二人、聖廟番役等がいる。師匠も二種類あり、按司師匠という門閥子弟の教授にあたる者と、官話師匠といって、官話を教える者とに分かれていた。

これらの師匠は、官生となって国子監で学んで帰国した者の中から優秀な者を選んで採用し、任期は三年である。師匠の下には助教として訓点調係二人、再学という国学を卒業した研究生が三人いて、師匠の教育を補佐役となっていた。毎日の授業は午前八時頃にはじまり、夕方六時頃までである。師匠は学生の質問に対応するため、昼夜とも学内にいなければならない<sup>※1</sup>。

教育の内容を見ると、四書五経、小学、近思録等の儒学の経典、と中国語の会話や公的文書の作成、詩文となっており、朱子学を中心とするものであったことがわかる。これは、国学の下部機関として国学と同時に設置された平等学校の教育内容にも共通している。ただ、平等学校の場合は、入学者の年令が十五〜十六歳で、修業年限がほぼ五〜六年となっている。平等学校は、首里に三か所設置されていた。

平等学校の他に、首里には一八三五年（尚育二・道光十六）に村学校と呼ばれる学校が設置された。当時、首里には二十の村があり、それが三つの平等に分かれており、十四の村学校があった。村学校のない村の子弟は、近くの村学校に通った。

## 八 まとめ

琉球には、久米村と首里という、それぞれの役割と特色を備えた教育・文化の中心があった。この両者の拮抗と融和のバランスによって、琉球の儒学を含む文化は、独自の発展と特色を持つようになった。

泊如竹によって、日本の薩摩で成長した訓読（文之点）が入ってきて、それ以前からあった僧門の学問と溶け合って、琉球の土族層を中心にして普及拡大した。訓読は、久米村の子弟たちにまで影響を与えていた。潘相の『琉球入学見聞録』『誦聲』の項目に、『大学』の冒頭の部分を、琉球でどのように読んでいるか、具体的に示している<sup>※2</sup>。これによると、薩南学派の訓読の方法が、久米村にまで及んでいたことがわかる。それは『大島筆記』（一七六二年）にも、「琉球の学校は小学四書六経を業とす……学校あまり大なるとは聞へず聖堂と並び立てり……学校の名は明倫堂と云、……久米村の学官は本唐の通り直読に教る也、夫を講官より国読へ通ずる様にも教る也、点本は薩摩の僧文之が点を用ゆ<sup>※3</sup>」とあって、久米村の明倫堂における教育の内容が具体的に述べられている事からも、いつそう明確である。

<sup>※1</sup> 同注20。同注の『沖縄県史』第十四巻資料編四所収（二）学校之規則の中の「覚」の項目参照。

<sup>※2</sup> 潘相「琉球入学見聞録」に「大學之道（大學、ダイアカカノ之道、ノミツハ。總讀云…ダイアカノミツハ）、在明明徳（明徳、メトタ、明、アチラカニスルニ、在、アリ。總讀云…メトタアチラカニスルニアリ）」と琉球における訓読の方法を示している。『臺灣文獻叢刊第二九九冊』清代琉球紀錄集輯『臺灣銀行經濟研究室編（中華民國六一年）八五〜九〇参照』

<sup>※3</sup> 戸部良熙著『大島筆記』『日本庶民生活史料集成』三一書房（一九六八年）所収。

久米村の儒学は、程順則、蔡温などの例から明らかのように、朱子学が基本になっているが、蔡温の学問はより実学的な傾向の強いものを持っていたようだ。

首里の国学の教育も、朱子学が中心になっていた。国学の学習内容から見てとれるように、儒学の他に官吏として習得しておかねばならない公的外交文書（呈文・咨文等）、漢語の習得、作詩等も学習していた。

以上のことから明らかなのは、首里の国学でも久米の明倫堂でも、教育といえは儒学を学ぶことであつたが、そのどちらでも、漢語の練習と作詩や実用的文章の習得が課されていた。また、首里では、テキストを訓読しながら、漢語の習得もしており、久米村では中国式の直読を基本にしながら訓読も併用していた。

「邊緣儒学與非漢儒学：東亞儒学的比較視野（17～20世紀）」国際学術検討会報告

（二〇〇六年三月 於台湾大学）